

# 目次

<p>一 大政奉還 山内容堂の建白 岩倉の野 心 討幕の密勅 政權奉還 の上表 小御所の會議 戊 辰開戦の責任者 前將軍の 下阪 會津藩主従の誓書 薩藩士の暴掠 薩摩邸の焼 討</p>	<p>二 伏見鳥羽の戦 討薩の表 開戦 慶喜公の 東帰</p>	<p>三 江戸及近邦の形勢 我が公の退隱 我が公の登 城を禁ず 慶喜公恭順の意 を表す 神保修理の刑死 我が公會津に帰る 輪王寺 宮の周旋 江戸の開城 輪 王寺宮令旨を會津に賜ふ 上野彰義隊の戦 我が公榎 本武揚に越後西軍の背後を 衝かんことを勸む 榎本等 軍艦を率ゐて亡命す 武川 信臣の死 田口治八の死</p>	<p>四 總野の戦 近藤勇の死 結城内訌 梁 田の戦 關宿の戦 宇都宮 の攻略 會津に入る 東照 宮神輿を移す 今市の戦 太田原城の陥落及び委棄 藤原の戦 大鳥圭介若松に</p>	<p>入る 山川大藏兵を疆内に 收む</p>	<p>五上 東方の戦 我が藩四境を固む 仙臺兵 を國境に進む 上杉齊憲會 津を救はんとす 仙臺米澤 二藩の周旋 會津藩相の歎 願 世良修藏等の専横 奥 羽列藩の會合 世良修藏の 殺戮 白河城の奪取</p>	<p>五下 東方の戦 白河城の陥落 奥羽越の同 盟 西軍植田に至る 棚倉 の陥落 泉城陥る 湯長谷 陥る平の戦 輪王寺宮を盟 主に推す 平城陥る 法親 王軍務を總攬す 棚倉回復 戦の不成功 守山の降伏 二本松城の陥落 仙臺兵の 退去軍議局の移轉 相馬の 背反仙臺藩の降伏 輪王寺 宮の歎願 莊内の降伏</p>	<p>六 越後方面の戦 長岡及び其の附近の戦 飯 山の戦 西軍越後に入る 三國峠の戦 雪峠の戦 小 出島の戦 鯨波の戦 片貝 の戦 榎峠方面の戦 西軍 長岡城を陥る 杉澤の戦 雷塚の戦 與板を襲ふ 島 崎の前役 指出の戦 今町 の戦 島崎の後役 大口の 役 森立峠の戦 福井の戦</p>	<p>大黒の戦 半藏金の戦 荷 頃の戦 與板方面對陣 東 軍長岡城を復す 新町口の 戦 新發田同盟に反き西軍 に降る 亀崎の戦 長岡城 再び陥る 河井の死 新潟 の戦 海岸戦争 灰爪の役 久田の前役 久田の後役 乙茂の役 赤谷口の防守 赤谷の激戦 新谷の戦 津 川の戦 西軍舟渡の背を衝 く 熊倉の大捷 川手幸八 の殉職 全軍退却 一の木 戸の戦 村松城の戦 保内 村の戦 宝珠山の戦 左取 の戦 石間の戦 角島渡頭 の對岸戦 五十島の戦 對 壘防戦 進撃軍若松に向ふ 進撃軍再び兵を班へす 上 田傳次の返戦 諸隊山三郷 に向ふ 眞ヶ澤の戦 稲荷 山の戦 堂目村の戦 小荒 井の戦</p>	<p>七 會津の形勢 軍制改革 輪王寺宮若松御 入城 農町兵の募集 諸侯 客兵の來去 客兵の入國を 禁ず 通貨の鑄造 金物の 献納 城中の糧食 塩の供 給</p>	<p>八上 會津城下の戦 自八月十九日 至八月廿四日 西軍の侵入 猪苗代城の陥</p>	<p>落 我が公瀧澤村に向ふ 戸の口原の戦 白虎隊の奮 戦 飯盛山の壯烈殉國 田 中神保兩藩相の自盡 南門 の戦 婦人及び老幼の殉節 蠶養口の戦 神保原の戦</p>	<p>八下 會津城下の戦 自八月廿五日 至八月廿九日 内藤陣將等の入城 守城の 部署を定む 穢多町進撃 女隊の奮戦 小田山を奪は る 護衛隊 西郷頼母の使 命 山川大藏の入城及更に 守城の部署を定む 長命寺 の戦</p>	<p>野國老の殉國 取締の選定 白虎隊屍體の埋葬 一般戦 死者の埋葬 脱走暴擧を戒 む 家名再興 斗南移住者 の辛酸 容保公喜徳公の謹 慎救免</p>
--	---	---	---	----------------------------	--	--	---	--	---	---	--	--	---

## 会津に生まれ

### 東大総長となった

### 山川健次郎

### 畢生の名著

### 本書を読まずして

### 戊辰戦争を

語ることは出来ない!



会津鶴ヶ城

# 會津戊辰戦史

マツノ書店

▼直販につき「書店経由不可」です。本社へ直接お申し込み下さい。本は数日で着きます。「返品可」代金後払いです。▼このたびは対象が遠隔地なので特価期限を長くしますがごく小部数印刷のため、売切れの節は平に容赦願います。

■体裁  
A5判 八八〇頁  
クロス装製上製貼函入

■定価  
二万二千元(税込・送料別)

■特価  
一万円(税込・送料別)

■特価締切  
平成十五年四月末

山口県徳山市銀座二の二三  
☎〇八三四〇二一九五  
FAX〇八三四〇三二九五

マツノ書店

んと決心し、母てる子、六十歳 妻させ子、四十歳 志津馬の妻すて子、二十歳 孫義彦一を刺し殺し、火を本一ノ丁の家に縦ちて入城せり、開城の後十郎は猪苗代に幽せられしが、時々人に向つて曰く、余は當時死を期して妻子を殺し而かも機を失ひて死する能はず、當日を追懐して甚だ遺憾に堪へずと歎息せりと云ふ。

青龍二番足輕隊中隊頭諏訪武之助の妻いし子、二十歳 は親戚中澤志津馬の家族と共に自刃す。會津會々報 第十一號

江戸詰武具役人野中此右衛門、五十歳 は久しく病に罹りて衰弱し歩行意の如くならず、此の日妻子を病床に呼びて曰く、我が藩の士風を顯はすは此の時に在り、我身體自由ならざれども豫め弾丸を貯へて萬一に備へたり、之を射盡さざれば死せず、汝等我先ちて難に殉ぜよ、我は之を果して後汝等と冥土に逢はんと、妻子皆之に同意す、此右衛門欣然として曰く、汝等の覺悟は殊勝なりと、聽て妻某、三十歳 長男六郎、八歳 長女某、年未詳 二女某、十八歳 五女某、十六歳 六女某、五歳 を介錯し、火を千石町の家<sup>に</sup>に放ち、病軀を力めて家を出づれば敵兵已に面前に在り、直ちに携ふる所の銃を以て射撃し、彈丸盡くるに及び大聲に我は會津藩士野中此右衛門なり、來りて我が首級を獲よと呼ばはりながら腹を屠つて死せり。七年史、會津會々報 第十一號 若松記

遠藤元之助の妻某、三十歳 は敵兵城下に迫ると聞き悲憤の情に堪へず、人に向つて身は女ながらも耻を忍びて生き残りよりは潔く國難に殉じ、一は歴代の君恩に報い一は我が藩の士氣を顯はさんと

云ひ、二男元次郎、七歳 長女某、十四歳 二女某、三歳 を刺し殺し、火を南壁町の家<sup>に</sup>に放ちて自殺せり。會津會々報 第十一號

高木豊次郎は出軍し、弟竹之助は戦争に負傷し家に歸りて療養せり、此の日事急にして家人を伴うて城に入ること能はず、是に於て豊次郎妻すて子、二十歳 は、長女しん子、十四歳 二女はつ子、二歳 を刺し殺したる後、繼母すい子、五十歳 竹之助と共に甲賀町通の自邸に自刃す。若松記、會津會々報 第十一號

青龍三番士中隊小隊頭西郷寧太郎の妻やほ子は黒河内式部の二女なり、今茲十六歳にして寧太郎に嫁せり、此の日祖母なほ子、六十歳 母みね子、四十歳 姉うら子、二十歳 と共に本三ノ丁の家を出て、郭内總鎮守諏訪神社、神社は西郷邸を距る に至り自刃す、其の時やほ子先づ七首を執つて喉を刺したるも急所を外れて絶息せず、姑みね子に介錯を乞ひたりしに、みね子聲を勵して曰へけるは、汝武門に生れ自ら死すること能はざるかと、やほ子之を耻ぢ再び七首を執り直し喉を貫いて死せり、家僕之を目撃し後人に其の狀を語れりと云ふ。會津會々報 第十一號

中野愼之丞は今茲伏見の戦に負傷せしが歸國の後再び従軍す、長男武之助、十八歳 は朱雀二番士中隊に屬し、六月二十四日棚倉の戦に死せり、父大次郎は年老いて歩行意の如くならず、妻やす子、三十歳 は永岡敬次郎、久茂 の姉にして志操雄壯男子に譲らず、此の日やす子は、大次郎、七十歳 母やを子、六十歳 七歳を介錯し、長女しん子、十五歳 二男省吾、十三歳 二女みつ子、九歳 三女たけ子、三歳 を刺し殺し、愼之丞の弟久五郎妻某に其の幼子を伴ひて家を去らしめ、火を本一ノ丁の家<sup>に</sup>に放ち、自刃の儘井中に投じて死せり、時に親



## 蘇る『会津戊辰戦史』

中村 彰彦

三浦梧楼子爵といえは、長州藩奇兵隊から出て陸軍中将となり、宮内顧問官・学習院長・韓国公使などを歴任した人物として知られる。その回想録『観樹將軍回顧録』はどこまでも虚心坦懐な口調で一貫し、かれの大らかな気性が偲ばれるのだが、その一節に長州藩と会津藩の比較をこころみたくだりがある。

「一体長州と会津とは、御維新の当時、順逆の両極端に立ったものだ。順の筆頭は長州で、逆の筆頭は会津だ。順逆共に終結一貫したものは、唯此藩ばかりだ。他の諸藩は、皆中途からその節を変じて居る」(傍点筆者)

戊辰戦争とは正義の軍隊が逆賊を討った戦いとする「順逆史観」は、今となつては過去の遺物にすぎない。しかし長州人三浦梧楼が、文久二年(一八六二)十二月以降、京都守護職として尊王攘夷派(討幕派)諸藩の前に立ちはだかった会津藩を、最後まで「節を変じ」なかつた存在として高く評価していたことは度量のひろさを感じさせる。

周知のように会津藩の初代藩主保科正之は、徳川二代將軍秀忠の庶子、三代家光にとっては異母弟であった。そこに発し、幕府と存亡をともしせよ、という「会津藩家訓」の精神に結晶した同藩固有の佐幕の思いこそが、幕末に至り九代藩主松平容保をして運命の選択に導いたのである。

明治元年(一八六八)九月二十二日、孤立無援の存在と化していた会津藩は、一カ月に及んだ苦難の籠城戦の果てに開城降伏。同藩は戊辰戦争に加わつた東軍諸藩のうち、唯一滅藩処分という過酷な扱いを受けた。

しかし、会津藩の特徴のひとつは、藩校日新館の学力水準が諸藩中抜群だったことにある。会津藩は戊辰の賊徒にあらず。その証拠に孝明天皇がもつとも深く信頼していたのは松平容保公だったのだ——汚名を雪ぐべくこの一点を文献史料によって証明してみせたのが、旧藩士北原雅長の名著『七年史』(明治三十七年(一九〇四))、おなじく山川浩『京都守護職始末』(明治四十四年)であったことは、つとに常識となりおおせている。

だが、前者は鳥羽伏見以降、降伏開城までの会津藩の戦いについては略述するにとどまっており、後者は大政奉還までで稿を閉じていた。すなわちこれ以降は、会津藩からみた戊辰戦争の実態を包括的に記述する史書の刊行が望まれることになったのである。

昭和八年(一九三三)に登場した本書『会津戊辰戦史』こそは、まさしくこのような要望に充分こたえるに足る戦記であった。驚くべき執念によって博搜された史料と生き残りたちの証言、それらの出典を明示しつつ各段階における会津藩の立場を簡潔にして主情を排した文体で詳述する本書を読まずして、戊辰戦争を語るのには鳥澁の沙汰に近い。

私は会津人ではないが、昭和の末にようやく本書を入手して精読するうち、胸が熱くなるのを禁じえなかつた。「白虎隊の奮戦」「婦人及び老幼の殉節」「女隊の奮戦」その他の各章には国(藩)を守るためためらいなく出撃し、健気に戦って散っていった者たちの事蹟が淡々と記述されているだけに迫力があふれており、読みさして目頭をぬぐつたことも一再ではなかつた。

かつて大岡昇平は米軍の俘虜となつたわが身を恥じつつも、雄々しく死地へ向かつた戦友たちの後姿を可能な限り克明に跡づけるべく、畢生のノンフィクション『レイテ戦記』を上梓した。

本書はゆえなく賊徒として討たれ、明治二年の雪解時まで遺体の回収も許されなかつた会津藩士たちの御霊に捧げられた紙の碑という点では、『レイテ戦記』に似た執筆意図に支えられている。ただし、大岡作品は時に抒情に流れる。史料をして語らしめよの原則をよく守り、つねに冷静に時代の悲劇を詳述し尽くした点では、山川健次郎をはじめとする編者たちが幾多の修正を重ねてなつた『会津戊辰戦史』に一層の重みを感じられるのである。

なお、今回マツノ書店から刊行される復刻版は価格を古書店での相場の半額以下に押さえこんだばかりか、幕末に関する重要史料である百頁に及ぶ『戊辰殉難名簿』(会津弔霊義会刊『戊辰殉難追悼録』所収)をも付録として収録することになった。

これは三千人以上に達した会津藩戦死者たちの石高・所属・戦没地・没年齢などを克明に調査した一覧表だが、イロハ順に印刷してあるのをアイウエオ順に並べ替えて頂いたので、より使い易くなったと思う。

本書がさらに長く読みつがれ、明治という名の近代の産みの苦しみを知るよすがとなれば、と思つてこの一文を草した。

『会津戊辰戦史』には、会津藩降伏直後の明治元年九月から十月にかけて、旧知の長州の参謀奥平謙輔と会津藩士秋月悌次郎の間に交わされた手紙が紹介されている。

奥平は会津藩と戦わねばならなかった不幸を嘆く。しかし会津藩が旧幕府のために戦わなければ「徳川氏之鬼」は祀られなかったらうと称える。そして今後はその忠節を朝廷に尽くして欲しいと願う。

情理を尽くした奥平の手紙に感激した秋月は、朝廷に尽くすことを誓った返信をしたためた。この文通により、秋月は奥平を会津の未来を託せる、信頼出来る人物であると見込む。後日、秋月は越後に奥平をひそかに訪ね、国家再興の周旋を依頼し、会津の少年二人を書生として預けた。少年の一人はのちに東京帝国大学学長を務め、『会津戊辰戦史』の監修者となった山川健次郎である。

会津にとつての明治維新は『会津戊辰戦史』に記録されているように、犠牲の歴史である。一方、長州は栄光の勝者という対照的な評価が一般化している。いまだ萩と会津若松両市民間には深いわだかまりの溝が横たわっており、「和解」も程遠いといわれる。

ところが、長州といえども政治家や軍人として栄達を遂げた者はほんの一握りに過ぎない。俗論派や脱隊兵として、歴史の闇に葬り去られた者たちも多い。会津にせよ長州にせよ、立場は異なるも「維新」という大変革の犠牲者だったことは確かである。

明治九年十月、前原一誠を首領とする長州の不平士族による「萩の乱」が起こる。これに呼応し、東京では永岡久茂ら会津士族たちによる反乱が計画されるも、未遂で終わるといふ、いわゆる「思案橋事件」があった。戊辰戦争から八年後、長州と会津の士族が共に立ち上がらねばならなかった意味を、もつと真剣に考えねばならない。

「明治」という新時代は、長州にとつても、会津にとつても到底納得のゆくものではなかった。かつての敵味方ではない。お互いが新時代の犠牲者という認識を強く持っていた。だからこそ腐敗、墮落を見逃すことが出来ず、手を結んだと私は見ている。

多くの長州人の本棚に『会津戊辰戦史』が、多くの会津人の本棚に『防長回天史』が収まれば素晴らしい。奥平と秋月がお互いの「志」を認めたように、お互いの「歴史」を認める努力をしなければ、「和解」などありえないのではないか。

(一坂太郎)



いまなぜ山口県で

## 『会津戊辰戦史』の復刻出版か

会津史談会元会長

畑 敬之助

会津の人間は長州に対し長いこと怨念を抱いてきた。

その原因は戊辰戦争に敗れて、①二十三万石が三万石に減らされ、②士族一万七千余名は流刑同様に、本土最北の地・青森県下北半島に移住させられて辛酸を嘗め、③若松城下での会津側の屍体千四百余は、九月に戦争が終わっても翌年雪解けまで埋葬を許されず、④慶応四年八月二十三日早朝の西軍侵入は予想以上に早く、折からの暴風雨と重なって農町民を右往左往させたいえ、暴行略奪が重なって人命財産に大きな損害を受けた。⑤また元治元年七月の蛤門の変では、皇居に銃砲を打ち込んだ長州兵は朝敵だから靖国神社に祀られるべきでないのに、あべこべに早くも明治二十一年に叙位のうえ合祀され、反面、会津側は再三の陳情にもかかわらずずっと大正四年、二十七年も遅れて合祀された。

会津はこれらの責任を長州に帰した。

しかし私は、⑤を除き、①～④については会津側に全面賛成ではなく、かつ、長州藩だけが加害者ではなかったことを取って断っておきたい。

では逆に、長州が会津に対し怨念を抱くことはなかっただろうか。明治の元勲伊藤博文の女婿・末松謙澄博士著『防長回天史』のうち、通巻四八で、①文久政変、②蛤御門の変、③第一次征長戦争、④第二次征長戦争の関連記述を読めば、長州側が会津を恨んでもおかしくない多くの事実を発見できよう。しかし今日、長州側からはそういう声は出ない。これは、長州側が戊辰戦争の最終勝利者だったために、市井三郎氏がいうように、「加害者と被害者との関係においては、つねに被害の事実認定において加害者のほうが盲目的になりやすい。被害者のみが、この事実を自覚的に体験する」(『歴史の進歩とはなにか』)と解すべきだ

ろうか。加害・被害の事実を相反的に共有しているにもかかわらず怨念感情では一致しない。その底に何があるのか。

私は昭和二十年まで日本人の骨髄に徹していた価値観、天皇至高の尊王意識と朝敵意識の絶対的ともいえる乖離に基づくものだと考える。これに比すれば前述の怨念の原因はその説明役に過ぎない。

忠誠の誇り高い会津人は、戊辰戦争以来昭和三年まで六十年間、朝敵と呼ばれることに臥薪嘗胆の日々を送ってきた。なぜ昭和三年か。実はその年、会津藩主松平家の女性が秩父宮家へ輿入れし、汚名は公然と霽れたと感じられたからである。「若松市史」は「旧会津領たる会津一市五郡の官民の歓喜は譬うるに物なく」九月下旬、三日間にわたり、官民合同祝賀会・旗行列・提灯行列等を行ったと記している。

ところで会津戦争については、文献数ある中で、①『七年史』(明治三十七年北原雅長著)、②『京都守護職始末1・2』(明治四四年、山川浩著、平凡社東洋文庫)、③『会津戊辰戦争』(大正六年、平石辨蔵著)、④『会津白虎隊十九士伝』(大正十五年、宗川虎次著)に、本書を合わせて、会津戦争五大名著と称する。

本書は五冊の中では一番遅く昭和八年に発行されたこともあって、それ以前の文献をも参考にし、かつ当時旧藩公邸に入入りしていた旧会津藩関係者の衆知をも集め得たほか、十五歳時籠城に参加し、『京都守護職始末』の実質的執筆者といわれる元東京帝国大学総長・山川健次郎の厳格な校閲をも経ているので、信頼性が極めて高い。

系譜は、慶応三年の「大政奉還」を境に、それ以前を「京都守護職始末」が、以後を本書が分担する構成をとっている。山川健次郎が両書に関わっていることもあって一貫性を失わない。

内容は政争・戦闘・戦後処理その他にわたり、戦闘記録については江戸・総野の戦のほか(会津)南方の戦をも含み、特に参戦者名簿の詳しくは他書の追隨を許さず、会津戦争研究者の好個の資料たり得よう。

読者は本書と『防長回天史』等を併読され、「明治国家」を創成したエネルギーの源流に思いをいたされることを切望してやまない。



白虎隊自刃の図 (白虎隊記念館蔵)